桃山時代の「歪み」についての試論
―美濃茶碗と備前茶碗銘「只今」から―

重根弘和

はじめに

桃山時代[1]に日本で作られたやきものを紹介するとき、「歪み」という言葉をよく使う。たしかに茶碗をはじめとする茶道具を見ると、ロクロで円筒状に成形した後、押さえる、削るなどの加工を行い、上から見た形が円形から逸脱したものがある。その形を伝えるとき、「歪み」や「歪んだ」といった表現が使用される。

辞書を見ると、「歪み」にはつぎのような意味がある。

『広辞苑』第二版　岩波書店　一九六九年
①形がゆがんでいること。いびつ。②個体が外力の作用を受けた時に生ずる形や体積の変化の割合。変形。ゆがみ。

『日本国語大辞典』第一六巻　小学館　一九七五年
①形がねじれたり、ゆがんだりしていびつになること。また、そうなることによってできた他の物とのずれやゆがみなど。②心のゆがみ。ねじけ。③物事の進みぐあいが順調にいかないで、狂いが生じること。行政や経済の進展などに、調和がとれていないところから生じる悪い影響や欠陥。④物体が外から力を受けたり、温度変化などによって生じる形や体積の変形。また、その割合。

「歪んだ」形とは、ねじれやゆがみが生じて、いびつになっている、ということだろうか。ちなみに引用した二つの辞書によると、「いびつ」は「飯櫃（いいびつ）」から変化し、小判形を指していたが、形が整わないさまの意味も持つ。

一　本稿の目的

まず、桃山時代の茶会記から、「歪み」について記載がある和物茶碗の記録を抽出する。そしてそれがどのような形であったか、記載に基づきながら考え、現代に伝わる当時の茶碗から候補をあげる。

また、「歪んだ」茶碗は、美濃を中心に、備前、信楽、唐津、高取など各地で作られた。その形の伝わり方を作品の観察に基づきながら考えると同時に、「歪み」に込めた意図についても検討を試みる。

二　「歪み」の記録

現在、身の回りにある茶碗や湯呑みをはじめ、日本のやきものの多くは、上から見ると円形である。それらを基準にすると、桃山時代に美濃で作られた瀬戸黒、志野、織部（写真1）の茶碗は形がゆがんで、いびつに見えるかもしれない。

写真１　織部黒茶碗（個人蔵）

博多の豪商、神屋宗湛（一五五一～一六三五）の茶会記『神屋宗湛日記』には、つぎのような記載がある。

「ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ候也。ヘウケモノ也。」

慶長四年（一五九九）二月二八日に行われた茶会の記録に登場する。席主は古田織部（一五四四～一六一五）である。「セト茶碗」とあるが、瀬戸と美濃における窯跡の分布状況から、これは美濃焼であるとされてきた。「セト茶碗」が具体的にどのような色や形であり、どの美濃茶碗にあたるかは不明であったが、近年翻刻された『宗湛日記見聞書』には、つぎのように記されていた。

「ウス茶ハ、セト碗也（クロシクツカタ也）。ヒヤウゲモノ也。」

この記載により、「ヒツミ候」と評された茶碗は、黒い沓形であるとわかった。黒い沓形の茶碗といえば、織部黒茶碗が思い浮かぶ（神津二〇二一、写真1）。ただし、織部黒茶碗がその頃に出現していた確かな証拠はなく、それよりも古くから作られていた瀬戸黒茶碗（写真2）であった可能性も残る。なお、瀬戸黒と織部黒を区別する明確な基準は示されていない。外面に縦方向のケズリ痕を残して底面がほぼ水平に広がり、口縁部が直立するものは「瀬戸黒」、太いロクロ目をよく残して腰部がやや高くなり、口縁部を外側に反らせる、もしくは厚くするものが「織部黒」と呼ばれる傾向にある。

『神屋宗湛日記』と『宗湛日記見聞書』にある茶碗の記述を抽出し、四種類に分けて整理したのが表1～4である。表1は「唐物」、表2は「高麗」、表3は唐物（天目）や高麗（井戸）を写した「イセ・金ノ」、表4は「セト・ヤキ」と記された和物茶碗をまとめた。

宗湛が特徴まで詳細に書き記した茶碗は、天目（表1―1・2など）、センカウ茶碗（表1―28など）、人形茶碗（表1―29など）、スヤン茶碗（表1―35）[2]といった唐物茶碗か、井戸茶碗をはじめとする高麗茶碗（表2―7など）である。

その中で、先ほど紹介した「セト茶碗」の記述は異例と言える。これ以外に薄茶碗で特徴まで記した事例は、人形茶碗とスヤン茶碗のみである（表1―29・35）。濃茶を合わせても人形茶碗は五回、スヤン茶碗は二回と、登場そのものが少ない。この二例は希少な舶来品であるため、特徴を書き記したのだろう。

写真2　瀬戸黒茶碗（個人蔵）

それに対してセト茶碗は五四回登場するが（表4）、慶長四年二月二八日（表4―84）以前に、特徴まで記した例は皆無である。セト茶碗やヤキ茶碗は、特徴を書き記すまでもなく、ありふれていたか、宗湛の関心が和物の「今ヤキ」になかったのではないか。いずれにしても、この日の「セト茶碗」はそれまでのセト茶碗とは異なり、宗湛の関心を引き、特徴を書き記したくなるものであったといえる。

これ以降であれば、慶長九年（一六〇四）二月八日に黒田長政（一五六八～一六二三）が使った茶碗を「セト也ヒツム、ツキ候也」（4―92）とし、セト茶碗ではないが、慶長一〇年（一六〇五）九月二三日に覚甫（生没年不詳）の席に登場した黒茶碗については「京焼也、ヒツム也」（表4―97）と記した。

このほか、『宗湛日記見聞書』にある年月日不詳の庚因（生没年不詳）会において「碗、今ヤキ、ヒツム」と記す。『神屋宗湛日記』に記載された庚因の茶席は、天正一四年（一五八六）一二月二五日の一回のみで、この日の茶碗はセト茶碗である（表4―11）。

仮にこれが天正一四年の記録であったとすると、古田織部が「クロシクツカタ」のセト茶碗を使用する一三年前に「ヒツム」今ヤキのセト茶碗が登場していたことになる。それぞれの記録は、瀬戸黒と織部黒の登場時期を示すようでもあるが、残念ながら年月日の記載はないため、そう主張する根拠にはなりえない。

表1　神屋宗湛の見た茶碗（唐物）

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
1	一五八六	天正一四年	一二月一五日		天王寺屋道叱	リン花台ニ天目スヘテ天目ハ、高二寸二三分、フクリン銀也。ウルシ古。土黒。薬ノ上ハ黄色ニ下薬ハ白シ。フクリント下ト白薬ソノマヽ		24
2	一五八六	天正一四年	（一二月一九日） 一二月一九日	（朝） 朝	宗及	天目 天目口三寸七八分、高二寸二三分、式ノ高一分半ホトニ外ノ薬ハゲカタニカヘル。下薬ハ白黄ウスヤウナルニ上薬黒キ内ニシヽラノ如クニシテ、チボくト上ニ星ノ如ク細一二ヒカルヤウナルモノアリ。内ノ茶置ニ段クボク、ソバニ細キ木ノ枝如クナル少高キ白ケタルモノアリ。底ニ朱ノ印ノアトカ少残ル、ソコノメンヲツ。白フクリン	高麗茶碗	30
3	一五八六	天正一四年	一二月二一日	朝	クサヒ〈ベ〉屋道設 道設	天目ハ、フクリンナシ。薬黒ハイカツキ見事ナリ。土モ黒也 台天目 黒台古。天目、フクリン無	セト茶碗 ヤキ碗	35 268
4	一五八六	天正一四年	一二月二六日	朝	アカネ屋宗佐	台天目ヨシ棚ニアリ 台ハ、黒シ。今右〈古〉ク、ミコト也 天目ハ、内クロクシテ、外ニ黄ナル薬アリ。土アカメ也 台天目	人形茶碗 碗	40 275
5	一五八七	天正一五年	正月二日	昼	道叱	台天目		43
6	一五八七	天正一五年	正月三日		大坂城大茶湯（宗易）	白天目　数ノ台スワル 白天目ハ、土クロク、薬黒クシテ、上白キ心ニミユル 井戸茶碗ニ ヤセクリ毛ノ天目 台天目		44
7	一五八七	天正一五年	正月三日		大坂城大茶湯（宗無）	尼子天目台なし アマコ天目ハ、薬・土クロシ。ナリナトハ同シ		44
8	一五八七	天正一五年	正月三日		大坂城大茶湯（宗及）	塗天目ニ茶筅入テ		44
9	一五八七	天正一五年	正月六日	朝	徳林	天目	高麗茶碗	54
10	一五八七	天正一五年	正月一〇日	朝	池田伊与	天目		57

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
11	一五八七	天正一五年	正月一一日	朝	羽柴美濃守（豊臣秀長） 大和中納言（豊臣秀長）	台天目 天目ハ、名ヲ忘レ候 台ハ、アマカ崎ダイ〈尼ヶ崎台〉也 台天目		57 280
12	一五八七	天正一五年	正月一六日	朝	ナヤ宗春 宗春	台天目 是ハ紹鷗所持ノ天目ト被仰ナリ 天目ハ、上薬黒ク、シヽラノヤウニアリ、下薬ハ黄也。フカリ〈ク〉ミエタリ 台天目	天目 天目ハ、ウス茶ノ時モ出候。鷗所持ノ天目ト被仰	64 287
13	一五八七	天正一五年	二月一九日 二月一八日	朝	塩屋宗悦 宗悦	天目 天目、土黒クノ〈シテ〉内ニアサキ心アリ。薬ノ内ニノキノ黄メナル薬アリ、外ニモ少有。ナタレ三ツ、骨高ニシテフカシ。高二寸二三分、口ハタ、ミノ目九ツ半ニアリ。底三ツ有、高一分半、メンヲチス、同底少有。下薬黄メニ白シ、シナタレトハ此心也 [図]凡此形也。姿ハ是ヨリフトシ。ナタレナトハコノ心ナリ 天目	人形茶碗 人形茶ワン	90 310
14	一五八七	天正一五年	二月二五日	朝	関白	天目 アマコ天目 アマコ天目ハ、土黒ク底ニ朱アリ。下薬ハ黄メニ白シ〈メ〉ニ上薬黒シ。天モクフカシ、宗悦ノ天モクノ比也。高サソレヨリフカクミユル		313 96
15	一五八七	天正一五年	三月二日	朝	油屋常悦 常悦	天目台 天目、口四寸三分ホト、但九目アリ。式一寸四分、但三メアリ。骨高ニシテドウニフクラナシ。土黒キ内ニ赤メニ底ニ朱ノアトアリ。下薬白ク横メニ、其上ニ黒薬カヘル。薬ノ上ニミサビノ如クナル星ノヤウニ細ニアリ。薬ノ内シヽラニ有。同内ハ中ヨリ下一段黒ク、中ヨリ上ハ薬クロキ内ニ、ノゴイハガシタルヤウニ赤メアリ。外ハ薬ハケ高也 台ハ、黒ク一段見事ナリ、古シ 台天目 天目	高麗茶碗 高麗碗	98

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
16	一五八七	天正一五年	三月二〇日	朝	ナヤ宗久	数ノ台ニ天目スヘテ数台ハ、ホウツキノ高二寸三分、下ノ広サ二寸四分、但五目半。縁二寸八リン五処ニエクホ付、縁ノフクリン六七分付、モノフクリン処ニ五六分疵付テ、ウルシヲキソロ。式ノフクリノ処ニモソノ如クニツクロイ有。五梅ハ筆ニテチヨツ〳〵ト付ソロヤウニ有。其向ニ一文字有。常ノ朱也、光明朱ニハナシ。天目ハ、口四寸ホト。下薬白メ、上薬黒ク、ウワシラケタリ。ナタレーツ候。土紫ニアリ。天目フカシ道具仕入ソロハ、高麗茶碗也	スヤン茶ワン	110
17	一五八七	天正一五年	三月二七日	朝	ヌシヤ源三郎（松屋久政）	台天目		113
17				昼	ヌシヤ源三郎	台天目		331
18	一五八七	天正一五年	三月二七日	朝	四聖坊ノ内、宗有	天目		114
18					四聖坊ノ内 宗有	天目	同道具（天目）	331
19	一五八七	天正一五年	六月二三日	朝	宗及	天目、台ナシ		117
20	一五八七	天正一五年	一〇月一四日	昼	関白	天目ヌリ ヌリ天目ハ、フクリン無、フカシ。薬黒ク、土モクロクシテ、「荒タリ。敷ホソシ。」		127
20						ヌリ天目		341
21	一五九二	天正二〇年	五月二六日	朝	宗凡	天目 天目ハ、ハイカツキ		157
21						天目		351
22	一五九二	天正二〇年	一月一四日	朝	（御餝之事）	白天目		170
23	一五九二	天正二〇年	一月一六日	朝	（御餝之事）	アマゴ天目		170
24	一五九二	天正二〇年	一月一七日	朝	太閤	ヌリ天目 ヌリ天目ハ、フクリン無。薬一段黒ク、骨高ニシテ、スソホソナリ。土黒シ		167
25	一五九二	天正二〇年	一月一七日	朝	（御餝之事）	ヌリ天目		171
26	一五九四	文禄三年	四月二日	朝	道叱	天目 天目ハ、ハイカツキ。 天目、フカシ、金ノフクリン也。其上黒クヌリ候也		194
27	一五九七	慶長二年	二月二四日	晩	薬院	天目 天目ハ、ハイカツキナリ。		212
28	一五八六	天正一四年	一二月二四日	朝	隼人 ［天王寺屋宗凡］	センカウ茶碗 センカウ茶碗、口五寸ホト、高二寸二三分、式ノアリ、内二三ヶ日ノ月ノ如クニクホミ有。シキマテ薬カラス。外ニカキメ七処ニアリ。内ニ雲ノヤウニカキメ七ツアリ。茶置ハ一寸ホトクホシ、又内ニ筋ノ如クニカキメニツアリ。ナラヘテ、内ノチヤジミ黄ニアリ		37
29	一五八六	天正一四年	一二月二六日	朝	アカネ屋宗佐	天目	人形茶碗 右茶碗、外ニカキメ、内ニ角印高、色アカシ。クワンヨウ也	40
29						台天目	碗	275
30	一五八七	天正一五年	二月一一日	昼	宗及	センカウ茶碗 ［図］キサミ六アリクワンヨウ也。白キ内ニシヽラノ如クニアリ。 底ニ朱ヲヤキ出ス。又ヒヽキノメニ寸ホト、イロウルシニテツクロイアリ シノ碗 碗		81
31	一五八七	天正一五年	二月一九日		塩屋宗悦	天目	人形茶碗	90
31			二月一八日	朝	宗悦	天目	人形茶ワン	310
32	一五八七	天正一五年	三月五日	朝	ナヤ了烏	人形茶碗		100
32					了烏	人形碗		318
33	一五八七	天正一五年	三月一七日	朝	道叱	人形茶碗 茶碗、人形ノテ也。中ノ底ニヲリイレビシアリ。底ニ筋ニツ、人形ハナクソロ		109
33						人形碗		328
34	一五八七	天正一五年	三月八日	朝	セキモト道拙	スヤン茶碗		102
35	一五八七	天正一五年	三月二〇日	朝	ナヤ宗久	天目 道具仕入ソロハ、高麗茶碗也	スヤン茶ワン也外ニカキメアリ	110
35					宗久	数ノ台ニ天目スヘ碗	スヤン外ニカキメアリ	329

表2　神屋宗湛の見た茶碗（高麗）

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
1	一五八六	天正一四年	一二月五日	朝	宗傳	茶碗高麗井戸		21
2	一五八六	天正一四年	一二月六日	朝	宗傳	道具ミナ前ヲナシ（茶碗高麗井戸）		22
3	一五八六	天正一四年	一二月九日	昼	宗傳	道具同（茶碗高麗井戸）		23
4	一五八六	天正一四年	一二月一〇日	晩	宗傳	道具同（茶碗高麗井戸）		24
5	一五八六	天正一四年	一二月一七日	昼	道叱	高麗茶碗		29
6	一五八六	天正一四年	一二月一九日	朝	及	天目		264
			（一二月一九日）	（朝）	宗及	天目	高麗茶碗	30
7	一五八六	天正一四年	一二月二〇日	朝	天王寺屋宗云	井戸茶碗、口四寸七八分、高二寸七八分、薬ノ内黒メニアリ。シキスリ候。常ヨリハムツクリト候。黒ツクロイ三ツ、イロウルシノツクロイ細ク五ツ。薬ノ色、少赤メ、クワンヨウヒヽキ也		33
8	一五八七	天正一五年	正月三日		大坂城大茶湯（宗易）	井戸茶碗也ヌルクタテラレ候 井戸茶碗二 井戸茶碗二ツ重テ白天目		44
9	一五八七	天正一五年	正月六日	朝	徳林	天目	高麗茶碗	54
10	一五八七	天正一五年	正月九日	朝	宗及	高麗茶碗		56
11	一五八七	天正一五年	正月一二日	朝	利休	井戸茶碗	棗ハカリ替候（井戸茶碗）	281
						井戸茶碗		60
12	一五八七	天正一五年	正月二〇日	朝	ヤブノ内道和	高麗茶碗		68
					道和	碗	メンツウニ碗ヲ入	290
13	一五八七	天正一五年	二月四日	朝	至柏	井戸茶碗		75
						碗		296
14	一五八七	天正一五年	二月五日	朝	一噌	高麗茶碗		76
15	一五八七	天正一五年	二月七日	昼	道叱	井戸茶碗		77

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
16	一五八七	天正一五年	二月一三日	朝昼	宗及	井戸茶碗		84
				昼		碗		305
17	一五八七	天正一五年	二月一九日	昼	モスヤ宗安	高麗茶碗 茶碗、口四寸五六分。茶置クボクシテメ四ツ有。中ニヤキヽレアリ。ハタソトソル也。呑口ウスク、式ホソク候。薬赤ククロメナルヤウニ候。スヤンノイロ也、ヒカル心ナリ。内ニ巾スレ、半分ヨリフカシ。又薬ヌメ〳〵トシテ其ノ下ノ土ヤワラカ也。細ヒヽキ有。五百貫文ニ代付候ト也		93
18	一五八七	天正一五年	三月一日	朝	油屋常悦	天目	高麗茶碗	98
					常悦	天目	高麗碗	315
19	一五八七	天正一五年	三月一一日	朝	道叱	高麗茶碗		104
						高麗碗		324
20	一五八七	天正一五年	三月一一日	昼	宗傳	高麗茶碗		105
21	一五八七	天正一五年	三月二〇日	朝	ナヤ宗久	天目 道具仕入ソロハ、高麗茶碗也	スヤン茶ワン	110
					宗久	天目 碗	スヤン	329
22	一五八七	天正一五年	三月二六日	朝	四聖坊	天目イセ	高麗碗	330
						イセ天目、高麗二道具仕入テ		112
23	一五八七	天正一五年	六月一九日	朝	関白	井戸茶碗		335
						井戸茶碗		118
24	一五八七	天正一五年	一〇月二二日		長岡玄旨	セト茶碗 井戸茶碗ハ、底スリタル也。外ニ台ニヘラ有。色ハ鳥子ノウスクアサキニシテ、「少」フガワリ有		124
					長岡玄旨（細川幽斎）	御茶碗 イト碗		339

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
25	一五八七	天正一五年	一〇月二二日	戌刻	宗及	井戸茶碗		133
						井戸碗		344
26	一五八八	天正一六年	三月二三日	朝	輝元	高麗茶碗		137
27	一五九〇	天正一八年	一〇月二二日	朝	休夢	高麗茶碗		150
			二二日			高麗碗		349
28	一五九二	天正二〇年	一〇月晦日	朝	宗湛	高麗茶碗		160
29	一五九二	天正二〇年	一月九日	昼	薬院	高麗茶碗		162
30	一五九二	天正二〇年	一月二二日	朝	休夢	今ヤキ碗	井戸茶碗	164
						碗	井戸碗	353
31	一五九二	天正二〇年	一月一五日	朝	（御飯之事）	井戸茶碗		170
32	一五九二	天正二〇年	一月一五日	昼	羽柴筑前	高麗茶碗 高麗茶碗ハ、ホソクシテフカシ、薬如常、クワンヨウヒヽキ		165
33	一五九二	天正二〇年	一月二二日	朝	有楽	高麗茶碗		172
						メンツウニ碗入		355
34	一五九三	文禄二年	正月二二日	昼	家康	高麗茶碗		180
35	一五九三	文禄二年	正月二二日	朝	石田杢	高麗茶碗		180
36	一五九三	文禄二年	七月二日	朝	高山右近	高麗		183
37	一五九四	文禄三年	三月五日	昼	石田治部少輔	高麗茶碗 茶碗ハ、コヨミ也。小長テ筒ノ如クアリ。		187
38	一五九四	文禄三年	三月二日	昼	薬院	高麗茶碗		188
39	一五九四	文禄三年	三月一七日	昼	鵜新右	高麗茶碗		188
40	一五九四	文禄三年	三月二九日		大和中納言	高麗茶碗		190
41	一五九四	文禄三年	四月九日	朝	草野宗楊	高麗茶碗		198
42	一五九七	慶長二年	二月二四日	朝	太閤	井戸茶碗高麗ナリ 井戸也、カウライ	白茶椀カウライ（友阿弥手前也）	208
						井戸碗	白茶椀ハ、高麗也。小クフカシ（ウス茶ノ時、友阿弥手前也）碗白カウライ、フルシ	361

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
43	一五九七	慶長二年	三月八日	昼	宗凡	茶碗 茶碗ハ、ホソクシテ高シ、紋有。クワンヨウヒヽキアリ。高麗ノヤウニミユル		216
44	一五九七	慶長二年	三月二三日	朝	浅野弾正	高麗茶碗		218
						水下二茶碗ヲ仕入テ		370
45	一五九七	慶長二年	三月二四日	朝	羽柴筑前（前田利家）	高麗茶碗		219
46	一五九七	慶長二年	三月二五日	昼	ウキ田宰相（宇喜多秀家）	高麗茶碗 茶碗ハ、井戸也。クワンヨウヒヽキ、ノミ口アツシ		220
47	一五九八	慶長三年	一月八日	昼	安芸宰相	高麗茶碗		370
48	一五九八	慶長三年	一月二三日（六）	昼	石田治部少輔	高麗白茶碗		224
49	一五九九	慶長四年	二月二日	昼	筑前中納言（小早川秀秋）	茶碗高麗		225
50	一五九九	慶長四年	二月二日	昼	石田治少	高麗茶碗		226
51	一五九九	慶長四年	二月一九日	昼	宗凡	碗、カウライ、大		371
52	一五九九	慶長四年	二月二八日	朝	古田織部	高麗茶碗 茶碗ハ、高麗也。大ニシテ口シメ下ハル。カキメ有テ、紋ハカラ草也、ホタンカ。青磁ノヤウニシテ、コヨミノ手也	セト茶碗	227
						碗	セト碗	372
53	一五九九	慶長四年	二月二九日	昼	宰相（毛利輝元）	高麗茶碗 茶碗ハ、高麗也、コヨミノ手也。ヒツム。式ヲ四ツニキサミ候。ヘウゲモノ也		228
						碗 碗ハ、高麗。シキヲ四ツニキサミ候、ヨカミメテ也。ヒツミ候也、ウス茶ニモ出	ウス茶ニモ出（高麗）碗	378
54	一五九九	慶長四年	三月朔日	朝	大谷刑部少輔	高ライ茶ワン		229
55	一五九九	慶長四年	後三月二五日	朝	道叱	高麗茶碗		234
					道叱	碗高ライ		382
56	一六〇〇	慶長五年	四月二日		輝元	茶碗ヒツハ（ム）、		383
57	一六〇三	慶長八年	正月九日	朝	岡田半左	茶碗カウライ白	黒今ヤキ	239
58	一六〇五	慶長一〇年	六月一六日	朝	有楽	高麗茶碗		246
59	一六〇五	慶長一〇年	九月一六日	朝	有楽	高麗碗		387

表3　神屋宗湛の見た茶碗（イセ・金ノ）

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
1	一五八七	天正一五年	正月一六日 正月一七日	朝	松井隆仙 龍仙（松井隆仙）	イセ天目、台シュンケイヌリ 天目イセ、台シュンケイ		65 288
2	一五八七	天正一五年	正月一八日	晩	池田伊与 池田	白イセ天目 碗		67 290
3	一五八七	天正一五年	正月二九日	朝	針屋宗和 宗和	イセ天目 イセ天目	白キイセ天目 道具前「ニ」同シ（イセ天目）	73 293
4	一五八七	天正一五年	二月一六日	昼	松井隆仙	イツモノ道具也（イセ天目、台シュンケイヌリ）か		89
5	一五八七	天正一五年	二月一七日	朝	ヤフノ内道和 道和	イセ天目 天目		90 308
6	一五八七	天正一五年	三月二六日	朝	四聖坊	カウ龍ノ台、イセ天目、高麗に道具仕入テ台ハ黒シ。龍数合六ツ、ホウツキニツ、縁ノ上ニニツ、同下ニニツ。カウタイツキ雲形ハカリ有、但ミナ雲形ノ内ニ龍有リ。ニツ向合テ也。内一ツハソバムキニ、一ツハマムキニ逢ナリ。皆龍ゴトニヒタイニシワノ如クニホリメ有モ、此心ニナリ。フクリン間ハ、一分半ホトツ、置テ彫アリ 天目ハ、イセ、新也		112	308
7	一五八七	天正一五年	六月二五日	朝	宗湛	イセ天目 御茶タテ申テヨリ、台ニスヘ進上申也。此時ニ、先、台ヲ御取ソロテ、被成御覧候ホトニ、天目ハ台ナシニ進上仕也	数台置テ。イセ天目新	121
8	一五八七	天正一五年	四月二八日		関白	金ノ天目		116
9	一五九二	天正二〇年	五月二八日		太閤	金ノ台天目 金ノ井戸茶碗		158
10	一五八六	天正一四年	二月二二日	晩	喏庵	セトチャワン	カウ龍ノ台、天目イ	330
11	一五八六 不詳	天正一四年 不詳	二月二五日 不詳	朝	庚因	碗、今ヤキ、ヒツム		39 273
12	一五八六	天正一四年	二月二五日	昼	具足屋立安	セトチャワン		39 274
13	一五八六	天正一四年	二月二七日	朝	紹二	碗 セトチャワン	中次、其外道具同（セト茶碗）	276 41
14	一五八七	天正一五年	正月一四日	朝	センヤ宗納 宗納	セトチャワン 碗		62 285
15	一五八七	天正一五年	正月一七日	昼	ヌリヤノ宗勺	セトチャワン		66
16	一五八七	天正一五年	正月一八日	朝	水落宗恵 宗恵	瀬戸茶碗 碗	メンツウニ碗入	67 288
17	一五八七	天正一五年	正月一九日	朝	圭音	セトチャワン		68
18	一五八七	天正一五年	正月二二日		センヤ宗納	セトチャワン		71
19	一五八七	天正一五年	正月二七日	朝	虎屋紹意	ヤキチャワン		71
20	一五八七	天正一五年	正月二八日	昼	森田道味	ヤキワン		72
21	一五八七	天正一五年	二月朔日	朝	菊屋宗可	ヤキワン		74
22	一五八七	天正一五年	二月二日	朝	大文字屋栄清	ヤキチャワン		74
23	一五八七	天正一五年	二月三日	朝	了己〈巳〉	セトチャワン		75
24	一五八七	天正一五年	二月七日	朝	鳴尾屋宗叱	セトチャワン		77

表4　神屋宗湛の見た茶碗（セト・ヤキ）

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
1	一五八六	天正一四年	二月二七日	朝	宗逸	茶碗今ヤキ		20
2	一五八六	天正一四年	二月五日	夜	喏庵	今ヤきノ茶碗		21
3	一五八六	天正一四年	二月七日	朝	本住坊	セト碗		22
4	一五八六	天正一四年	二月八日	昼	大和屋立左	セト茶碗		23
5	一五八六	天正一四年	（二月九日）	夜	新屋了心	セト茶碗		23
6	一五八六	天正一四年	二月二二日	晩	立左	道具同シ（セト茶碗）		24
7	一五八六	天正一四年	二月二五日	昼	喏庵	其外道具前二同（今ヤきノ茶碗）		27
8	一五八六	天正一四年	二月二七日	朝	新屋了心	セト茶碗		28
9	一五八六	天正一四年	二月二二日	朝	クサヒ〈ベ〉屋道設 道設	天目 天目	セト茶碗 ヤキ碗	35 268
10	一五八六	天正一四年	二月二二日	晩	喏庵	セト茶碗		36
11	一五八六 不詳	天正一四年 不詳	二月二五日 不詳	朝	庚因	セト茶碗 碗、今ヤキ、ヒツム		39 273
12	一五八六	天正一四年	二月二五日	昼	具足屋立安	セト茶碗 セト茶碗		39 274
13	一五八六	天正一四年	二月二七日	朝	紹二	セト茶碗 碗	中次、其外道具同（セト茶碗）	41 276
14	一五八七	天正一五年	正月一四日	朝	センヤ宗納 宗納	セト茶碗 碗		62 285
15	一五八七	天正一五年	正月一七日	昼	ヌリヤノ宗勺	セト茶碗		66
16	一五八七	天正一五年	正月一八日	朝	水落宗恵 宗恵	瀬戸茶碗 碗	メンツウニ碗入	67 288
17	一五八七	天正一五年	正月一九日	朝	圭音	セト茶碗		68
18	一五八七	天正一五年	正月二二日		センヤ宗納	セト茶碗		71
19	一五八七	天正一五年	正月二七日	朝	虎屋紹意	ヤキ茶碗		71
20	一五八七	天正一五年	正月二八日	昼	森田道味	ヤキ椀		72
21	一五八七	天正一五年	二月朔日	朝	菊屋宗可	ヤキ椀		74
22	一五八七	天正一五年	二月二日	朝	大文字屋栄清	ヤキ茶椀		74
23	一五八七	天正一五年	二月三日	朝	了己〈巳〉	セト茶碗		75
24	一五八七	天正一五年	二月七日	朝	鳴尾屋宗叱	セト茶碗		77

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
25	一五八七	天正一五年	二月八日	朝	本住坊	ヤキ茶碗	道具ヲナシ（ヤキ茶碗）	78
26	一五八七	天正一五年	二月九日	朝	本住	ヤキ碗	碗	297
27	一五八七	天正一五年	二月九日	昼	クサヒヤ道設	セト茶碗		79
28	一五八七	天正一五年	二月二日	朝	立左大和屋	ヤキ茶碗		79
29	一五八七	天正一五年	二月二日	昼	ナヤ与太郎	セト茶碗		299
			二月二日		嗜庵	道具如常（今ヤキノ茶碗）か（セト茶碗）		79
30	一五八七	天正一五年	二月二三日	朝	宗宅	碗	碗	303
					タニ宗宅	セト茶椀		83
31	一五八七	天正一五年	二月二四日	朝	ナヤ宗黨	セト茶椀	同道具也（セト茶椀）	304
					宗黨		碗	83
32	一五八七	天正一五年	二月二五日	朝	ヌリ屋了勺	セト茶椀		85
33	一五八七	天正一五年	二月二〇日	朝	天満樵斎	セト茶椀		87
34	一五八七	天正一五年	二月二二日	昼	宗凡	碗		95
						セト茶椀		313
35	一五八七	天正一五年	三月六日	昼	春世	碗		95
						ヤキ茶椀		318
36	一五八七	天正一五年	三月九日	朝	宗及	碗		102
						セト茶碗		320
37	一五八七	天正一五年	三月一〇日	昼	宗及	碗		103
						セト茶碗	碗	322
38	一五八七	天正一五年	三月一二日	朝	道設	碗	碗	104
						ヤキ茶碗		324
39	一五八七	天正一五年	三月一四日	朝	チウ宗甫	セト茶碗		105
					宗甫	セト碗		325
40	一五八七	天正一五年	三月一六日	昼	千紹安	セト茶碗		105
					紹安	碗	碗	326
41	一五八七	天正一五年	三月二八日	昼	福寿院	ヤキ茶碗		108
						セト椀		115
42	一五八七	天正一五年	六月一四日	朝〈昼〉	本住坊	ヤキ茶碗	道具ヲナシ（ヤキ茶碗）	331
43	一五八七	天正一五年	六月一四日	昼	クサヒヤ道設	セト茶碗		334
44	一五八七	天正一五年	六月二二日	朝	立左	ヤキ碗		335
			（六月二二日）		立左大和屋	ヤキ茶碗		336
45	一五八七	天正一五年	一〇月九日	朝	ナヤ与太郎	セト茶碗		119
46	一五八七	天正一五年	一〇月二二日		嗜庵	ヤキ碗		123
					玄旨	セト茶碗		338
					長岡玄旨	井戸茶碗		339
47	一五八七	天正一五年	一〇月二〇日	昼	休夢	今ヤキ		124
						セト茶碗		342
48	一五八七	天正一五年	一〇月二二日	昼	コノ村屋宗二	セト茶椀		129
49	一五八九	天正一七年	七月一九日	朝	毛利一岐守	セト茶碗		132
50	一五九〇	天正一八年	九月一〇日	昼	利休	黒茶椀茶ノ後ニ又内ヨリセト茶ワン持出テ、台子ノ上ノ黒茶碗ニ取替ラル、黒キニ茶タテ候事、上様御キライ候ホトニ此分ニ仕候ト也		143
			一〇〈九〉月一〇日			今ヤキノ碗御茶過テ、別ノイセ碗ヲ台子ニ立〈置〉替候。始末ノ今ヤキ碗ハ、内ニ御トリ入候。上様御キライ候ホトニ、油断ナク取替テ置候ト御申ナリ		146
51	一五九〇	天正一八年	一〇月二〇日	朝	玉甫和尚	黒茶碗		147
			二〇日			今ヤキ黒〈茶〉碗		347
52	一五九〇	天正一八年	一〇月二〇日	昼	利休	黒茶碗		148
			二〇日			碗		347
53	一五九〇	天正一八年	一〇月二四日	朝	宗及	黒〔茶〕碗		150
			九〈一〇〉月二四日			碗		350
54	一五九〇	天正一八年	一〇月二八日	朝	布屋徳左	セト茶碗		151
55	一五九〇	天正一八年	一月朔日	朝	鵜新右	黒茶碗		151
56	一五九〇	天正一八年	一月五日	朝	鵜新右	道具モ同シ（黒茶碗）		151
57	一五九二	天正二〇年	一月一〇日	朝	石田木工	セト茶碗		163

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
58	一五九二	天正二〇年	一二月二二日	朝	休夢	今ヤキ碗	井戸茶碗	164
						碗	井戸碗	353
59	一五九二	天正二〇年	一二月二〇日	昼	浅野弾正	セト茶椀		171
					浅野	碗		354
60	一五九二	天正二〇年	一二月一七日	昼	住吉屋宗無	セト茶碗		173
					宗無	碗		356
61	一五九二	天正二〇年	一二月一九日	昼	不干	セト茶椀		173
						碗		357
						セト茶碗		173
62	一五九二	天正二〇年	一二月二五日	朝	宗凡	碗		358
						セト茶碗		174
63	一五九二	天正二〇年	一二月二六日	朝	池田伊与	セト茶碗		174
					池田	碗		358
64	一五九二	天正二〇年	一二月二六日	昼	南坊（高山右近）	セト茶碗		174
						碗		359
65	一五九三	文禄二年	正月一七日	朝	有楽	赤セ〈ヤ〉キ茶碗		178
66	一五九三	文禄二年	正月一七日	昼	宗無	セト茶碗		179
						セト碗		360
67	一五九四	文禄三年	三月六日	昼	長束大蔵	今ヤキ茶碗		188
68	一五九四	文禄三年	四月朔日	晩	道叱	黒ヤキ茶碗（四月二日朝に記述）		193
69	一五九四	文禄三年	（四月三日）	（昼）	木原次郎兵衛	ヤキ茶碗		196
70	一五九四	文禄三年	四月六日	朝	庄村利右衛門	セト茶碗		197
71	一五九四	文禄三年	四月七日	昼	前但馬	ヤキ茶碗		197
72	一五九七	慶長二年	二月二五日	朝	ナヤ宗黨	ヤキ茶碗	ウス茶ノ時モ、道具同シ	213
73	一五九七	慶長二年	三月朔日	朝	千紹安	ヤキ茶碗	ウス茶ノ時ハ、道具右同	214
					道安	碗	碗	364
74	一五九七	慶長二年	三月八日	晩	春世	ヤキ茶碗		217
						碗		369
75	一五九七	慶長二年	三月一二日	昼	道春	今ヤキ茶碗		218
76	一五九七	慶長二年	三月二四日	晩	ナヲエ山城	セト茶碗		220
77	一五九七	慶長二年	三月二七日	朝	山岡道阿弥	セト茶椀		221
78	一五九八	慶長三年	一一月八日	昼	安芸宰相	セト茶椀		222
79	一五九八	慶長三年	一二月二五日	昼	浅野弾正	今ヤキ茶椀		224

番号	西暦	年号	日付	時間	席主	濃茶、もしくは濃薄の表記なし	薄茶	頁
80	一五九八	慶長三年	一一月二七日	昼	浅野弾正	ヤキ茶碗		224
81	一五九九	慶長四年	二月七日	昼	安芸宰相（毛利輝元）	今ヤキ茶碗		225
82	一五九九	慶長四年	二月九日	晩	石田治少	今ヤキ茶碗		225
83	一五九九	慶長四年	二月一九日	昼	宗凡	今ヤキ茶碗		226
84	一五九九	慶長四年	二月二八日	朝	古田織部	碗	セト茶碗、ヒツミ候也。ヘウケモノ也	227
						高麗茶碗		
						碗	ウス茶ハ、セト碗也 クロシクツカタ也。ヒヤウゲモノ也	372
85	一五九九	慶長四年	三月三日	朝	安国寺和尚	今ヤキ茶碗		229
						今焼茶碗	碗	380
86	一五九九	慶長四年	三月一一日	朝	覚甫	今ヤキ茶碗		232
87	一五九九	慶長四年	後三月九日	昼	筑前中納言（小早川秀秋）	今ヤキ茶碗		233
88	一六〇一	慶長六年	一〇月九日	朝	黒田甲州（黒田長政）	黒茶碗		236
89	一六〇一	慶長六年	一二月二五日	朝	如水	セト茶碗		238
90	一六〇三	慶長八年	正月四日	朝	母里与三兵	茶碗黒今ヤキ		239
91	一六〇三	慶長八年	正月九日	朝	岡田半左	茶碗カウライ白	黒今ヤキ	239
92	一六〇四	慶長九年	二月八日	朝	黒田筑州（黒田長政）	セト茶碗 茶碗、セト也ヒツム、ツキ候也		242
93	一六〇五	慶長一〇年	五月二五日	朝	覚甫	今ヤキノ茶碗		243
94	一六〇五	慶長一〇年	六月朔日	昼	古田織部	碗		243
						唐津ヤキ茶碗		
95	一六〇五	慶長一〇年	六月一五日	昼	宗凡	黒茶碗		244
96	一六〇五	慶長一〇年	六月一五日	昼	疋田右近	今ヤキ黒茶碗		245
97	一六〇五	慶長一〇年	九月一三日	晩	覚甫	黒茶碗 黒茶碗京焼也、ヒツム也		247
						碗	碗	388
98	一六〇五	慶長一〇年	九月二五日	朝	道勺	黒茶碗		249
99	一六〇六	慶長一一年	九月二二日	昼	古田織部	黒茶椀		250
						碗		390
100	一六〇六	慶長一一年	一〇月五日	昼	覚甫	碗		396
						黒茶碗、京ヤキ		254
						碗		
101	一六〇六	慶長一一年	一〇月九日	昼	宗凡	黒茶碗、京ヤキ		255
102	一六〇六	慶長一一年	一〇月一一日	朝	下九兵	黒茶碗		257
103	一六〇六	慶長一一年	一〇月一六日	朝	母里又左	セト茶碗		257

表1～4の出典　筒井紘一編『茶書古典集成』5　淡交社　二〇二〇

歪みについての記述は、これよりも遡る。天正一二年（一五八四）三月二日に豊臣秀吉（一五三七～一五九八）らを招いた茶会で、津田宗及（生年不詳～一五九一）が「薄茶　ひづミたるかうらい」を使用し、その四日後の六日昼にも「ひづミ茶碗」を使う（『天王寺屋会記〈宗及自会記〉』）。

「ひずみ」ではないが、ほぼ同意と思われる「ゆがみ」茶碗を宗及は、天正一三年にたびたび使用する（二月一一日昼、二月一四日昼、二月一五日朝、二月一七日昼、四月二七日、五月八日昼、五月一三日朝、五月一六日朝、八月一八日昼、いずれも『天王寺屋会記〈宗及自会記〉』）。

三　神屋宗湛が見た「ヒツミ候」

織部が「セト茶碗、ヒツミ候也」を使用した翌日、慶長四年二月二九日には、毛利輝元（一五五三～一六二五）が茶席を設ける。輝元は前日に行われた織部の茶会に、宗湛らと出席していた。輝元が使用した茶碗については、つぎのような記載がある（表2―53）。

「茶碗ハ、高麗也、コヨミノ手也。ヒツム。式ヲ四ツニキサミ候。ヘウゲモノ也。」（『神屋宗湛日記』）

「碗ハ、高麗。シキヲ四ツニキサミ候。ヨカミメテ也。ヒツミ候也、ウス茶ニモ出。」（『宗湛日記見聞書』）

茶碗は暦手の高麗茶碗で、「ヒツミ候」とする。なお、『宗湛日記見聞書』によると、このとき使用した「水下（建水）セト」も「ヒツミ候」とある。宗湛は、織部の使った「セト」も、輝元の使った「高麗」も、ともに「ヒツミ候」とし、「ヘウケモノ」もしくは「ヘウゲモノ」と記す。

「ヘウケモノ」は漫画『へうげもの』（講談社　二〇〇五～二〇一八）の影響もあってか、古田織部を象徴する言葉のように受け取られることもあるが、宗湛は輝元が使う高麗茶碗も「ヘウゲモノ」とし、織部の茶席に登場した美濃茶碗だけに使った言葉ではない。また、「ヒツミ候」の評価も、織部によるものではない。茶会に出席した宗湛が記した言葉であり、織部自身がその形をどのように認識していたかはわからない。

広島県に伝わる茶道上田宗箇流の流祖、上田宗箇（一五六三～一六五〇）は、千利休（一五二二～一五九一）から茶の湯を学び、織部とも親交が深かった。その宗箇が語ったとされる記録『宗箇様御聞書』には、織部は「ひらい沓形」を好み、「織部切形」があったと記す。宗湛が「ヒツミ候」と評した形には、何らかの意図が込められていた可能性がある。

当時「セト茶碗」と呼ばれた美濃茶碗は、先に紹介した瀬戸黒か織部黒、もしくは志野や黒織部ではないかとされる。現在の発掘調査成果などに基づく研究では、瀬戸黒が先行し、やや遅れて志野が登場した後に、瀬戸黒は織部黒となり、そこに志野の釉薬や技術を取り入れて制作したのが黒織部といわれる。

先行する瀬戸黒や志野の多くは、ロクロで円筒状にした後、押さえる、削るなどの変形を加える。そのため上から見た口縁部は、円を基調としながらも、円でも楕円でもない形になる。角がはっきりつかないため三角形や四角形とも言いがたく、全体を包括する適切な表現が見つからない。それに対して織部茶碗の多くは、三方に明確な平坦面も持ち、その形は角を丸くした三角形や台形に近い。

織部や志野の茶碗を手に取り、両掌の中で回すと、おさまりがよい場所がある。それは桃山時代に作られた多くの美濃茶碗に認められる共通した特徴である。推測になるが、瀬戸黒や志野の茶碗を作っていた頃は、掌へのおさまりを強く意識し、形はそのための変化に委ねるところがあった。ところが作り続ける中で、どのような形にするとよいかわかると定型化が進み、織部茶碗を作る頃には、その形を伝える切型まで用意された可能性がある(3)。

四　「歪み」の伝わり方――備前茶碗銘「只今」から考える

備前では桃山時代に数々の茶道具が作られたが、茶碗は少ない。岡山後楽園が所蔵する「只今」の銘が付く茶碗は、数少ない事例の一つである(写真3)。「只今」は茶碗にしては大きく、鉢ではないかともいわれてきた。しかし、形や加工方法を見ると、美濃で作られた志野茶碗の影響が認められる。ロクロで円筒状に成形した後に外側から押さえて変形し、外面はほぼ全面を縦方向に削ってロクロ目を消す。口縁部、胴部、腰部と互い違いに入れる横方向のヘラ目は、美濃の黄瀬戸茶碗銘「朝比奈」とも特徴が共通する。

さらに視野を広げると、唐津には「玄海」の銘が付いた茶碗があり、これも志野茶碗の影響を受けたとされてきた。「玄海」は「只今」とほぼ同じ大きさとなり(胴径「只今」一四・〇×一三・六㎝、「玄海」一四・五㎝)、重さは「只今」よりも重い(重量「只今」六九三・八g、「玄海」八〇三・七g)。唐津には「玄海」のほかにも志野を意識した茶碗が複数あり、それらにはヘラで櫛垣文を刻む。こうした茶碗は彫唐津とも呼ばれる。なお、ヘラ描きの櫛垣文は「只今」にもある。櫛垣文は志野茶碗にもよく見られるが、その場合は鉄絵で表現する。

「只今」や「玄海」をはじめとする志野に影響を受けた茶碗を見ると、歪ませる、もしくは手に沿わせるといった理念のようなものが各地に伝わりながらも、形については明確に決まっておらず、さらには各産地の素材に合わせた作り方も確立していなかった印象を受ける。端的にいえば、不慣れに感じる。そのため「只今」は、茶碗としてはやや大きく感じるのではないか。

なお「只今」に添う桐箱の蓋裏には、「古備前茶碗／我等所持／宗意(花押)」と記した墨書がある。これは宗偏流の茶人、吉田宗意(一七八七～一八四八)によるもので、遅くとも江戸時代の後半には茶碗と認識され、大切に伝えられていたとわかる。

「只今」は小森松菴(一九〇一～一九八九)が所持した後、昭和二九年(一九五四)に広田不狐斎(一八九七～一九七三)が岡山県へ寄贈する。「只今」の銘はその際に谷口古杏(一八八九～一九六八)が付けた。

写真３　備前茶碗 銘「只今」（岡山後楽園蔵）

備前や唐津では、志野茶碗よりも後出する織部茶碗の影響を受けた茶碗も作る。その中には「只今」や「玄海」のように大きなものはなく、茶碗として適切な大きさに収まる例が多い。切型のような見本か、具体的な指示が伝わり、各地の陶土と釉薬の特性を把握した上で制作したのではないか。

慶長一九年（一六一四）に開窯した高取の内ヶ磯窯跡（尾﨑・福岡市美術館二〇一三）でも織部の影響を受けた茶碗を作る。その形の特徴は織部茶碗の中でも新しい傾向にあるものと共通する。それからしばらくして「歪み」の流行は収束するが、同じ形でありながら、地域ならではの質感や色調を活かした茶碗の制作が各地で続く。

五　「歪み」の意図

天正八年（一五八〇）正月一四日、牧村長兵衛（一五四五～一五九三）が「ユガミ　茶碗」を使用する（『天王寺屋会記〈宗及他会記〉』）。これが「ひずみ」や「ゆがみ」のある茶碗について記した、現状で確認できる最も古い記録となる。ただし「ユガミ」と「茶碗」の間が空き、産地の記載もないため、茶碗ではない茶道具の呼称である可能性も残る。産地までわかる事例になると、先に紹介した天正一二年三月二日が最も古い。津田宗及が秀吉らを招いた際の薄茶席で、「ひづミたるかうらい」を使う。歪みの登場は「かうらい」が「セト」に先行する。そのため、慶長四年二月二八日に織部が使用した「セト茶碗、ヒツミ候」は、高麗茶碗に影響を受けた茶碗であった可能性もあるが、ここでは別の視点から検討を試みる。

あらためて述べるまでもないが、茶碗が使われた場所は茶室である。当時の茶室は、現代の一般的な生活空間と比べると狭い上に暗かった。それは今に伝わる茶室からもうかがえる。暗い中でものの違いを感じ取るには、視覚よりも触覚のほうが有効である。そうした空間で使用する茶道具は、おそらく触感も重視された。

美濃焼において「歪み」が顕在化するのは瀬戸黒茶碗である。瀬戸黒茶碗はロクロで円筒状に成形した後、両掌で押さえたり、ヘラで縦方向に削ったりして形を整える。それまでに瀬戸・美濃で作られた茶碗には認められない方法で成形する。

瀬戸黒茶碗が登場する一六世紀後半にケズリを多用していた茶碗といえば、長次郎による樂茶碗がある。美濃にその技法、もしくはそこに込めた理念のようなものが伝わったか、樂茶碗を作らせていた人々の指示が及んだ可能性がある。ロクロ成形を基調とする美濃で、手づくね成形の樂茶碗で行われていた作り方を取り入れた結果、「歪んだ」ように見える形の「セト茶碗」が生まれたのではないか。

ところで、長次郎作と伝わる樂茶碗には、複数の作者が制作したものを含むとの指摘がある（磯野一九五一）。長次郎七種にも数えられる「早船」は、「駿河と申人才工焼」（『江岑咄之覚』）とされ、藤村庸軒（一六一三～一六九九）も長次郎作ではないとした（『本朝陶器攷證』）[4]。なお「早船」の銘は、「利休が茶会を催したあるとき、招かれていた細川三斎が、この茶碗は何という茶碗かと尋ねたところ、利休が早船で高麗より取り寄せたと答えた」（磯野一九五一）との逸話に由来する。また、同じく長次郎七種の一つ「臨済」は織田有楽作（『茶道四祖伝書』）、もしくは「うらく焼也」とされる（『江岑咄之覚』）。

たしかに長次郎作と紹介されてきた樂茶碗を見ると、その中には形態差があり、特徴によって分類が可能である。例えば、高台内のケズリ痕には複数の種類がある。先に触れた「早船」は「の」字状のケズリ痕を残して兜巾状にするのに対し、ケズリ痕が逆「の」字状に巻く事例もある。このほか、兜巾状にしない茶碗もある。具体例をあげると、つぎのとおりである。

・「の」字状のケズリ痕
「道成寺」「無一物」「獅子」「早船」など
・逆「の」字状のケズリ痕
「太郎坊」「二郎坊」「つつみ柿」「大黒」「ムキ栗」「俊寛」など
・兜巾状にしない
「万代屋黒」

他の部分にも目を向けると、口縁部は外側に反るものと直立するものがある。胴部は直線的なものとくびれが入るものがある。また、腰部を見ると、丸いもの、やや高い位置に稜線が入るもの、高台からほぼ水平に広がるものがある。これらの違いが何を示すかは不明であるが、なるべく多くの作品を集めて比較を行うと、一定のまとまりや傾向が見いだせる[5]。ときにそれは、作品群の中にある工人差や時期差などを導き出す手がかりとなる。

長次郎による樂茶碗は、口縁部が内抱え気味に直立し、腰部の位置が低くなると、口縁部や腰部に波状の揺れが生じて、胴部の数箇所にくぼみが入るものが増える。こうした形の特徴のみを抽出すると、美濃の瀬戸黒茶碗や志野茶碗と共通する。ただし、志野茶碗とより形が近い樂茶碗は、長次郎よりも田中宗慶（例「天狗」）や常慶の作とされるものの中にある。

同じ用途のものを二つ並べて比較すると、必ずどこかに類似点が見つかるともいわれ、安易な比較は避けるべきかもしれない。もちろん基礎となる形が手づくねである樂茶碗とロクロを利用した美濃の茶碗では、作品から受ける印象は大きく異なる。しかし「歪み」の起源や、そこに込められた意図を考える上で意味を持つと考え、あえて産地や制作技法に隔たりのある美濃焼と樂焼の比較を行った。

おわりに

「歪み」のある茶道具は桃山時代に流行する。その流行を一つの様式と捉え、「桃山様式」や「織部様式」と表記する記述もある。「歪み」は、円形から逸脱した形であると端的に説明するとき、有効な表現であると同時に、流行した時代のイメージを伝えたり、共有したりするとき、一定の役割を果たしてきた言葉でもある。しかし、作品をそれぞれ比較すると、「歪み」にも強弱や形の差異がある。そこから傾向を見いだし、変遷を示すことも可能である。

近年、発掘調査の成果に基づき、茶道具の廃棄時期を詳細に分析する研究が増えた。ただし、導き出された廃棄時期から、伝世品の制作時期を考えるときには注意が必要である。伝世品とまったく同じといえる出土品は少ない。なかでも茶碗は見つかる地点が限られる上に、出土数もそれほど多くはない。なるべく具体的な作品、もしくは特徴を示した上で、比較と検証が求められる(6)。「歪み」の変遷が提示できれば、それは比較するときの指標にもなり得る。

桃山時代の茶碗に見られる「歪み」について、宇野三吾はつぎのように記す（宇野一九五六）。

「お茶盌の形の裡にも特にその歪んだ処を賞しているものが多いが、これ等のひずみや歪みを単に不完全で窯の焼きそこねのように考える人達も多いが、こんな意味の不完全さを賛たんしているのではない。その心としているところは実は茶碗自体を彫刻的な、また造形物としての形の均こうや動的な姿の美しさを発見しているのであって、単に歪んでいる事にその事があるのではない。」

すでに「単に歪んでいる」と捉える危険性を指摘する。また宇野は、茶陶の「賞美鑑賞の路」は数通りあるとし、「視覚的な美」に加えて「触覚的な美」についても触れる。

やきものについて研究をするとき、見て気づいたことは、写真や図を有効に活用すれば他の人に伝えられる。文様や色を表す言葉も多い。それに対して、触感の言語化は難しい。手に触れた感覚などを第三者に伝え、共有するのはとても困難である。そのため触覚に基づく分析は、研究として成立しづらい。

しかし当時の茶会記には、様々な窯業地のやきものをつぎつぎと取り上げる様子が記される。おそらく色や模様だけでなく、形や素材に基づく質感も大切にされていた。「歪み」と表現されてきた形は、「視覚」の面白さ以上に、「触覚」(7)を意識していた可能性がある。

《註》

(1) 政治史では織田信長が入京した永禄一一年(一五六八)、または信長が室町幕府の将軍足利義昭を追放した天正元年(一五七三)から、家康が江戸幕府を開いた慶長八年(一六〇三)の前年までを安土・桃山時代とするが、美術史では作品の様式から見て、豊臣家が滅ぶ元和元年(一六一五)までを含めて桃山時代とする(『日本美術史事典』一九八七)。場合によっては、寛永年間(一六三〇年代)まで桃山時代の範囲に含める(山根一九五六)。

(2) センカウ茶碗:中国・福建省の窯で一二、三世紀に焼いた青磁とされる。人形茶碗:中国・龍泉窯系の窯で一五、六世紀に焼いた青磁。スヤン茶碗:宗胡録茶碗とされるが、高麗茶碗の一種であった可能性もある。なお、宗胡録茶碗は鉄絵で文様を描いた白釉陶器で、タイ・スワンカローク窯で作られた。

(3) 適切な例えではないかもしれないが、おにぎりの作り方と似ている。子どもがはじめて作るおにぎりを見ると、丸が崩れたような何とも形容しがたい形が多い。それに対して、どのような形が食べやすいか、またどのように力を入れると握りやすいかを知った大人が作ると三角形になる。現代は型を利用して、その形を量産する。

(4) 「早船」の制作者に対する疑問は、一五代樂吉左衛門(現直入)が「作行きのちがい」に基づき指摘している(樂二〇〇一)。

(5) 林家晴三は大きく二つ、一五代樂吉左衛門(現直入)は四つのまとまりがあるとする(林家一九七六a b、樂二〇〇一)

(6) 「志野を特徴づける釉薬としての長石釉の出現時期の問題と、角向付や意図的に変形の加えられた茶碗・向付に代表される志野に特徴的な器形の出現時期の問題が、ないまぜにして議論されている」との指摘がある(尾野二〇二一)。

(7) 茶碗とは逸れるが、料理研究家の土井善晴は、「和食は今も冷え冷え、熱々が大好きな触覚主義である」と語る(土井二〇二一)。触覚は「もっとも根源的な感覚」ともされる(テクタイル二〇一六)。

《参考文献》

・『朝日日本歴史人物事典』 朝日新聞社 一九九四年
・磯野風船子 『樂茶碗』 河原書店 一九五一年
・『上田家文書調査報告書』広島市教育委員会 二〇〇五年
・宇野三吾 「茶碗・皿」『伝統芸術講座』第八巻生活芸術 伝統芸術の会編 河出書房 一九五六年
・尾崎直人・福岡市美術館編 『筑前高取焼の研究』福岡市美術館叢書五 福岡市文化芸術振興財団 二〇一三年
・尾野善裕 「茶道具・会席食器の考古学」『季刊考古学・別冊三三 美術史と考古学』雄山閣 二〇二一年
・金森徳水 『本朝陶器攷證』 艸書房 一九四三年
・熊倉功夫 『現代語訳 茶道四祖伝書—利休伝・織部伝・三斎伝・宗甫伝』 中央公論社 二〇二一年
・神津朝夫 「織部の茶会記を読む 七」『和風』第一五三号 上田流和風堂編集室 二〇二一年
・千宗員編 『江岑宗左茶書』 主婦の友社 一九九八年
・高橋義雄編 『大正名器鑑』普及版第九編 寶雲舎 一九三七年
・筒井紘一編 「神屋宗湛日記」『茶書古典集成』五 淡交社 二〇二〇年
・テクタイル 仲谷正史、筧康明、三原聡一郎、南澤孝太 『触楽入門』 朝日出版社 二〇一六年
・土井善晴 「おいしさの気配」記憶の手触り第九回『淡交』九月号 淡交社 二〇二一年
・『日本美術史事典』 平凡社 一九八七年
・林家晴三 「概説/長次郎 侘の造形」『日本陶磁全集』二〇 長次郎 中央公論社 一九七六年a
・林家晴三 「長次郎・光悦」『世界陶磁全集』五 桃山(二) 小学館 一九七六年b
・山根有三 「絵画」『図説日本文化史大系 第八巻 安土桃山時代』 小学館 一九五六年
・樂吉左衛門 「楽茶碗」『茶道具の世界』四 淡交社 二〇〇〇年
・樂吉左衛門 『樂焼創成 樂ってなんだろう』 淡交社 二〇〇一年
・樂直入 「樂茶碗」『茶の湯の茶碗』第五巻 淡交社 二〇二一年